図書館員の四季：私のシネマ探訪

映　画　と　私

社会保険神戸中央病院
林　　伴子

夏の映画と言えば「怪談」というのが子どもの頃の定番だった。怖い思いをしたせいか、私はスプラッターもホラーも苦手な正統派？映画ファンを自認している。で、何を見ているかというとそれ以外のもので面白そうだと食指の動いたものになる。

とりあえず、手近なところにあった映画のパンフレットを出してみた。傾向としては、ＳＦ、ミステリー、アニメに幾分偏っているようだ。でも、何度見ても飽きないのは“サウンド・オブ・ミュージック”－最初のオープニングシーンだけでも、ああ見に来て良かったと思ってしまう（ちなみに再公開される度に劇場で見ている）。近年、ミュージカル映画というジャンルがすっかりすたれてしまったのは残念なことである。

日本の映画はあまり見ていない。国民的映画である“寅さん”も実は一本も見ていない。ただ、最近は“Shall We Dance？”のような素敵な作品もあるので見逃さないようにと思っている。一番最近見たものも邦画で、“トキワ荘の青春”という昭和30年代の漫画家の卵達を描いた作品である。主役の本木雅弘以外は無名に近い役者達なのでドキュメンタリーを見ているような気になった。少しはあの頃を知っている分だけ懐かしい思いがした。

洋画では“いつか晴れた日に”－エマ・トンプソンがアカデミー脚色賞を受賞した映画で彼女が主演している。19世紀のイギリスを舞台にした文芸作品で、見終わった後、ほっと溜息をつきたくなるような美しい映画だった。

この頃よく物忘れをするので、私の‘映画鑑賞必携’になっているのが‘パンフレット’である。情けないことに、顔は覚えているのに名前が出てこない、など日常茶飯事である。だから、私はパンフレットを買うため？に映画館にでかけて行く。それに、映画館で見る、大きな画面で見ることこそが映画の醍醐味だと思うのである。ビデオでは得られない迫力を求めて、映画館に通い続けたい。

◇　◇　◇

映画の感動は、私の活力剤！

日本赤十字愛知女子短期大学
塩瀬　亜紀

映画は大好き。試写会招待や鑑賞券プレゼントにせっせとハガキを書くこともあって、月に３、４回は映画館に行く。おまけに最近はビデオを借りたりもする。数は見ているのだが、その作品の選び方にはかなり片寄りがあるように思う。

私にとって映画は、日常空間からの脱出であり、ストレス解消法。だから難解なものや、気分が落ち込みそうなものは見ない。人がやたらと殺されたりするものや、ホラー、ついでに邦画もほとんど見ない。底抜けに楽しい、心が暖かくなる、しみじみと美しい、元気になる、そういうポイントをかなえてくれそうな作品を選んでいるようだ。ラブストーリーならなおのこと・・・。

そんな中途半端な映画好きではあるが、オススメをいくつか紹介させてもらうと――、

『ショーシャンクの空に』（スケールが大きく最後のドンデン返しが痛快。なんと図書室を作るシーンがある！）

図書館員の四季：私のシネマ探訪

『ギルバート・グレイプ』（なんとも切ない兄弟愛、家族愛）

『グランブルー』（海とイルカが美しい。真夏に見ると涼しさを感じるのでは？）

『フランキー＆ジョニー、恋のためらい』（渋い大人の恋物語。バックに流れるドビュッシーの「月の光」がまた良くて、帰りにＣＤを探してしまった）

『陽のあたる教室』（人は人の心に大きなものを残せるんだなあ）

これらはシミジミ度、ホノボノ度が高く、見終わって心の中で（いやぁ、映画って本当にイイもんですねー）とつぶやいた印象深い作品。皆さんも、お勧めのものがありましたら、ぜひ教えて下さい。

◇　◇　◇

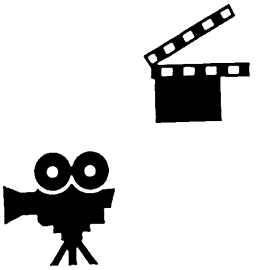
『軽　　蔑』
Jean-Luc Godard (1963)

国立京都病院
小田中　徹也

尊敬し愛する夫が家庭外で見せた矮小性に軽蔑を感じていく妻の葛藤と不貞。・・・

芸術には妥協を許さないはずの脚本家の夫が、小切手をちらつかせる傲慢な俗物プロデューサーの作品論に対して後退していく。彼女は次第に不信と軽蔑感を深めるのだが、夫はそれを理解できない。しかも、そのプロデューサーは彼女にあからさまな興味さえ示すが、それをも夫は腑甲斐なく許している。結局、彼女はプロデューサーとの不貞行為という形で夫と自己への復讐を通じ葛藤からの脱出をはかるのだが。もっとも、妻の不貞は後にエマニュエル夫人の浮気によって社会的に認知されてしまった。ほんとか？

バルドーの官能的な白い肌、眼に染みいるカプリの青い海。仄暗く甘美なテーマ音楽、ホメロスからブレヒトまで引用の数々。ユリシーズとペネロペの夫婦関係を重ねた物語の高い格調。夫婦愛のロマンティシズムを逆説的な手法によって表現した、あの時代らしい仏映画で、モラビア原作の'60年代前半のゴダール監督作品。こうした傾向の映画は他にもアントニオーニをはじめ当時は結構あったし、熱心なファンも多かった。

『卒業』のような結婚するまでを描いたアメリカ映画に対し、結婚してからを描いたこうしたヨーロッパ映画は、大人の映画といえばそれまでだが当時も今も一般的にはあまりうけない。観客の参加を要求する「大人の映画」で疲れるより、血沸き肉踊る「子供の映画」で涙と笑いに暮れスカッとして、明るい明日をむかえたいのである。・・・

５年ほど前、VZ-Editor の軽快さに悪のりして映画評を気取った雑文です。今読み返すと気恥ずかしい限りですが、難解な作品を好んで観ていた昔を懐かしく思いだします。